

巻頭言

グローバル・コンサーンとソーシャル・ジャスティス、 または、不正義・不公正への関心

澤田 稔

2010年4月に設立された本研究所（Institute of Global Concern=IGC）の前身が、1981年4月に設立された社会正義研究所（Institute of Social Justice）であったことは、もはや関係者以外にはあまり知られていないかもしれないが、ことほど左様に、本研究所の活動理念において、グローバル・コンサーンとソーシャル・ジャスティスという理念は相即不離なのである。この意味で、IGCは、グローバル化が顕著になる時代におけるソーシャル・ジャスティスの実現に最大の関心を払おうとする研究機関だと言えよう。

2010年前後と言えば、文科省による高等教育政策の策定過程で、それまでにも増してグローバル化対応という課題が自覚的に言及されるようになり、2014年にはスーパー・グローバル大学創成支援事業という、ある種の感覚からすれば気恥ずかしいとも思えるような名称の政策に帰結したことが思い出される¹。現在も継続されている同事業ウェブサイトのトップページには、たとえば、次のような文言が並ぶ。すなわち、「グローバル競争の波が日本の高等教育界にも押し寄せる中、大学には国際競争力の強化や国際展開の推進、そして、次代を担うグローバル人材の育成が求められている」と²。このような目的意識は珍しいものではなく、むしろ教育研究機関によるグローバル化対応の趨勢とも言えよう。

他方、IGCに目を転じると、その目的は、「上智大学の建学精神に基づいて、人間の尊厳と連帯を脅かすようなさまざまな問題をグローバルの視点から研究し、その成果をもって学生や社会に意識化の場を提供し、さらに変革のための実践を通じて世界のひとびとの尊厳と連帯を実現する人材を養成すること」と示されている。さらには、その活動内容のトップには、「グローバル化する社会における貧困や暴力などの諸問題についての調査研究」が掲げられているのである。これらに鑑みれば、本研究所の「グローバル・コンサーン」とは、「グローバル化する社会における貧困や暴力などの諸問題」をはじめ「人間の尊厳と連帯を脅かすようなさまざまな問題」に対する関心であるとパラフレーズできよう。関心といっても、それは上に見たようなグローバル時代における国家主義的な利害関心（interest）のごときものではなく、本学の建学精神である”For others, With others.”に照らして言えば、グローバル状況において不当に不利で苦難な状況に陥っている弱き人々やそうした人々を生み出す構造的諸問題に対する顧慮・懸念（concern）としての関心なのである。

このような意味でのグローバル・コンサーンを、ソーシャル・ジャスティス（社会正義・社会的公正）という観点から見返してみると、それは、グローバル化が加速する中で生じている

¹ 実際、文科省も英語表記は Top Global University Japan としており、仮にここで super などという形容詞をあてがうとかなり奇妙な印象を与えることになるだろう。

² 文部科学省. Top Global University Japan. <https://tgu.mext.go.jp> (2023年3月31日閲覧)

不正義、あるいは社会的に不公正な状況に対する関心・懸念を意味すると解釈可能ではないだろうか。むしろ、IGCは、社会正義とは何かという問いの探求に連なる様々な企画や活動にも注力してきている。しかし、同時に、目前の不正義・社会的不公正を具体的に取り上げ、学術的基盤に根差しつつ、その是正を目指す試みにも同等の知恵と労力を注いできていることもまた間違いない。

ここで想起されてよいのは、米国の政治哲学者ナンシー・フレイザー (Nancy Fraser) が2012年に雑誌『ニュー・レフト・レビュー (New Left Review)』に発表した小品「正義について：プラトン、ロールズ、イシグロから得られる教訓 (On Justice: Lessons from Plato, Rawls and Ishiguro)」である。というのも、小説家カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) の代表作『私を離さないで (Never Let Me Go)』の政治哲学的文芸批評とでも呼びうるこの作品で、フレイザーは、プラトンやジョン・ロールズの正義論を足がかりにしながらも、この小説の正義論的意義を浮き彫りにする際に、不正義への着眼に重点を置いているからだ。ここでは、上記小説を未読の方に物語の筋を明かすこと (いわゆるネタバレ) を防ぐために詳述は避けるが、ここでは、ロールズが言うところの正義に適った基本構造を備えていないことが明白な社会が描かれている。フレイザーによれば、この小説は「正義を、否定を通じて考えるように誘う」。「イシグロは、正義に適った社会秩序を表現しようとは全くせずに、読者が徹底的に不正義だとみなすことになる社会秩序のぞっとするような像を提示している」と。さらに「実際、正義は、直接的に経験されることはない。対照的に、私たちは不正義をこそ経験し、その経験を通してのみ正義の観念を形成する。私たちが不正義だとみなすものの特徴を熟考することによってしか、代替案として重要なものに関する感覚を手に入れられない」、だからこそ、「私たちに必要なのは、不正義に関する感覚を研ぎ澄ますことなのだ」とフレイザーは指摘するのである³。先に見たIGCの活動目的や活動内容は、このような方向性と軌を一にしているように思われる。そして、本誌本号における各「特集」には、その顕著な具体的活動例を見出すことができるだろう。以下では、そのラインナップを紹介しておきたい。

「特集1 日本の移民政策と市民社会からの声」は、3つのセクションから成り、そのうち、「検証・日本の移民政策」は、技能実習制度や特定技能制度に関わって改正入管法が生み出している搾取関係や人権問題、及びそのダイナミズムについて、歴史的経緯をも踏まえた多角的議論が展開されたシンポジウムの記録で、関連政策動向に詳しい与党政治家も招き、この方面における第一線の研究者が顔を揃えた充実の内容となっている。ここでの各報告を参照すると、まさにその基本構造が不正義に満ちた社会を私たちが現実に生きていることを思い知らされ、同時に、そのような社会に対する代替案をどう作り出せるのかという問題が私たちに突きつけられていることがよく分かる。これに続く、「クルド音楽を知る—「声」が響き渡る、円形劇場 (映画上映・コンサート・対談)」は、中東で4番目の人口を擁しながら国土を持たない民族として知られ、グローバル化状況で(難民条約を批准した国とは思えないほどの日本の難民政策にも)翻弄されるクルド人の文化を知る機会として開かれた催しの簡潔な報告である。難民申請者を含めこの日本に2000人規模で在住するクルド人に関心を払い、その関心

³ Fraser, Nancy. On Justice: Lessons from Plato, Rawls and Ishiguro. *New Left Review*, 2012, 74: 41-51.

を広めようとする企画の積極的意義は再度強調されてよい。さらに、「入管のレイシズムに対する Z 世代の取り組み—仮放免者との連帯」は、入管施設で見られる、あるいは入管制度をめぐる具体的な不正義に目を向け、その是正に向けた活動に取り組んできた本学学生が、被害を受けた当事者や、関連する事案を追ってきたジャーナリストとともに標記のテーマに関して議論を試みるべく企画したセッションで、そこで明らかにされる事実の不当性は、それを知る者を暗澹たる気持ちにさせるとしても、若い人々が学生団体を組織して、少しでもその状況への治癒策を探ろうとしているところに一縷の希望を見出したくなる。

「特集2 困窮する若者と住まい—政策形成に市民はどう参加できるのか—」は、社会福祉及びその政策を専門とする研究者たちと若者の自立支援に取り組む NPO 法人経営者の実践家が登壇し、住居という観点から、経済的に困窮する若者の社会保障問題に関する理解を深め、こうした問題の解決に向けた運動への参画を多くの市民に呼びかけようとした注目すべきセッションである。経済的に困窮する若者への社会政策としては、仕事・賃金の保障、つまり、労働政策に目が向きがちであるが、社会保障における基本材としての住居という点に着眼して、日本における住居事情が若者の自立を阻んでいる状況を具体的に明らかにし、一般に看過されてきたこの問題の所在及び重要性とその是正に向けた政策的・実践的可能性に関する一定の見識を示した提案性の高い議論である。

「特集3 組合によるエンパワーメント—インド SEWA（自営女性協会）の運動から学ぶ—」は、インドにおいて貧困の度合いが深刻で非抑圧的な社会的地位に滞留させられることが多い零細自営女性の労働組合「自営女性協会（Self Employed Women's Association: SEWA）」を研究してきた人類学者による、この労働組合の沿革・現状、及びこの組合活動の中でエンパワーメントを経験した女性の生活史に関する充実した報告をもとにした討論の記録である。世界女性ユニオン会議で SEWA からの参加者と出会った労働組合運動のリーダーは、日本における女性労働組合の到達点と課題を、社会問題に関心をもち労働組合にも関わった本学学部生は、その体験を踏まえて討議に参加した。登壇者らの発言は、当事者中心の運動を展開するために、いかに労働者自身をエンパワーするか、労働組合の専従職員はどのように関わるべきか、階級の差をどう乗り越えるのかといった連帯を目指す際に直面する課題について極めて示唆的な知見を与えてくれるものとなっている。

「特集4 連続企画「社会の中のカリタス」第1回・第2回講演録」は、ドイツのフライブルク大学で研究者として、この方面の学術的な取り組みに携わるキリスト者を招き、2回にわたって開催されたオンライン講演会の貴重な記録である。このカリタス（*caritas*）という言葉は、もともとラテン語で神の愛を意味し、チャリティ（*charity*）の語源でもあるらしい。カトリックと社会正義ということで言えば、中南米において社会的に非抑圧的な立場にある人々の救済に向けた運動に身を投じた「解放の神学」が想起されるが、これとは異なるにしても、カリタス学も、「福祉セクターにおける社会奉仕」、「教会と社会における連帯の醸成」、「社会的政治的アドボカシー活動、特に政府による社会立法の改善の促進」を主要分野として、カトリックの宗教的理念を基盤にした社会福祉活動の理論と実践を追究する営みであるという意味では一定の共通性を見出すこともできるかもしれない。カトリックに基づく社会的不公正に対する学際的研究という、本学本研究所ならではの極めて有意義な企画となっている。

ここで、再びフレイザーのソーシャル・ジャスティス論（正義論）に触れておきたい。以上に見てきた本号各特集における具体的な社会的不正義への学問的眼差しや不正義に対抗する運動論は—その意味でアカデミズムとアクティヴィズムが相即不離なかたちで展開する取組み—は、フレイザーが「再帰的正義」と呼ぶものに関して、次のように述べるアプローチと親和的であるように思われる。それは、「政治的議論に必要な問題解決への志向を取り入れつつ、あらゆる解決を暫定的なものとして、疑問や中断可能性、ひいては再開に晒されるものとして扱う」という視座である⁴。フレイザーは、これを「正義の文法」と呼んでいるが、これは「反・不正義の文法」と言い換えてもよいかもしれない。したがって、本号にまとめられた議論や報告も、当然、多角的な批判や代替案に開かれている。その意味で、本号が多くの読者を得て、本研究所に様々な意見が寄せられることを期待するばかりである。

さて、残された紙幅で、ごく簡略ながら、本号の各「報告」に関しても通覧しておきたい。

「Engaging Students in Co-creating a Sustainable Campus as a Living Lab」は、上智大学をリビング・ラボとして、自然環境・社会・人間の持続可能性の探求に取り組んだ活動の報告、及びこれに基づく大学への提言である。リビング・ラボとは、身近な生活空間を実験の場として、一定の重要性を備えた問題の解決策を、生活者・市民が主体的に、あるいは当事者意識を持って研究・開発していく手法として近年注目されているが、この報告でも学生団体を中心とした活動報告となっている点が目を惹く。

「18歳で「おとな」になるの？—知っておきたい成人の意味」は、2022年4月の民法改正により成人年齢の引き下げに伴う諸課題の学内セミナーという時宜を得た企画の報告である。ここからは、この民法改正の背景にはどのような事情があったのか、また、私たちが今後注意すべきことは何なのかという諸点を理解する上で有意義な示唆を得ることができよう。

「トークセッション「憲法と戦争を考える」」は、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化や米中対立の激化という状況下で、日本における政治状況を見据えて、改めて冷静に現行憲法の意義を再評価することを目指したセッションの要約的報告である。このセッションは、YouTubeでその全編を視聴可能であるので、ご参照いただければ幸いである⁵。

「ドキュメンタリー映画「もっと真ん中で」上映会・トークイベント」は、日本国内で初めて「ヘイトスピーチ」に対する損害賠償訴訟を提起し、これに勝訴した原告＝被害当事者とその支援者を中心に描いた貴重な記録映画の上映会と、その当事者を招いて開かれたトークイベントについて、この企画に深く関わった本学学部生による活動報告である。この映画は、ヘイトスピーチ問題に関連して、在日朝鮮人であり女性でもあるという「複合差別」の問題にも関心を寄せている点にも特徴があり、この点にまで議論が及んだことの意義は繰り返し強調されてよいだろう。

「声をあげる女性なぜ、叩かれるのか？—女性たちへのエール—」は、フランスで、魔女

⁴ Fraser, Nancy. *Scales of justice: Reimagining political space in a globalizing world*. Columbia University Press, 2008, p.72. [ナンシー・フレイザー, 『正義の秤 (スケール): グローバル化する世界で政治空間を再想像すること』 向山恭一訳, 法政大学出版局, 2013年, 100頁.]

⁵ 石川健治・猿田佐世・中野晃一・三浦まり. 「20221109 トークセッション『憲法と戦争を考える』」. https://youtu.be/_0OcdRuEsz8 2022年11月29日. (2023年3月31日閲覧).

狩りの歴史における魔女の意味を単なる犠牲者にとどまらない不屈の反逆者として読み直し、現代における女性蔑視のあり方を批判的に論じたベストセラー本の著者であるジャーナリストを招いて開かれる予定だった講演会（及び、政治分野でのジェンダー平等問題に関する専門家である本研究所所員との対談）が、講演者の都合により急遽中止されたため、来るべく再来日を期した報告となっており、講演者の紹介と予定されていた講演原稿の抄訳からなるが、これらだけでも関心を惹く。

「第2回 入門！スフィア・スタンダード—国際基準で考える必須の視点・態度・行動—」は、災害や紛争などの被災者に対する人道支援活動において、支援側が現場で守るべき普遍的最低基準に関する入門的理解と、コロナ禍における震災避難所の事例を用い、その応用的考察を目指したオンラインセミナーの概要報告である。この人道主義的支援基準は、それを地球（sphere）規模で広めるべく、国際赤十字と NGO が立ち上げたプロジェクトを通じて取りまとめられたもので、マジョリティ中心の人道支援ではなく、より社会的に弱い立場の人々への配慮を重視した支援のあり方が整理されている。

「ソフィア哲学カフェ」は、本研究所でシリーズ化され長く継続されている名物企画だが、これまで哲学対話のテーマはその回ごとに多様だったのに対して、今年度は一貫して「日本国憲法」をテキストにして進められたという点が注目される。その中でどのような興味深い論点が浮上したのかが垣間見える概要報告になっている。

このように、本号でも、以上のような充実のラインナップをお届けできることを編集責任者として大変嬉しく思う。また、それだけに本号を 2022 年度内に発行できなかったことを心苦しく感じている。ご寛恕を乞う次第である。

澤田 稔（さわだ みのる）

（グローバル・コンサーン研究所、上智大学総合人間科学部）